

## 論文四の一

海神イザベル・ファルネーゼ王妃と

奇蹟のカストラート歌手ファリネリ

第一節 イザベル・ファルネーゼ皇女のスペイン王室入興

第二節 国王フィリップ五世の重病と歌手ファリネリの音楽療法

第三節 大震災への国際的支援と

フェルディナンド六世治下の宮廷音楽

## 第一節、イザベル・ファルネーゼ公女のスペイン王室入興

王妃マリアナ・ヴィトリアが大地震の急報を宛てた実母、王太后イザベル・ファルネーゼはスペイン国王フィリップ五世の後妻である。現在は奇蹟のカストラート歌手、ファリネリのパトロロンとしてまず知られるが、スペインの膨張政策を加速する辣腕の王妃として当時は畏怖された。一八六四年に完成した大著『評伝 プロシヤ王フリードリッヒ二世』のなかでイギリスの文人トーマス・カーライルは、イザベル・ファルネーゼをスペインの海神と呼称し、十八世紀ヨーロッパの列強角逐に関して特筆すべき人物と注目する。

スペインの王位には鬱病のフィリップ五世、ルイ十四世の孫にしてブルボン朝の始祖が座し、その傍らに屈強な婦人、海神イザベル・ファルネーゼが控えていた。彼女の野望は執念として（神聖ローマ帝国皇帝）カルロス六世のそれに劣らず、むしろより鮮明なものであった。「中略」イザベル・ファルネーゼはカルロス六世を追い詰め、世界を壊乱した。言わばふたりの大物、フレデリック二世とスペインの海神が二十余年にわたり相互に繰り返した進駐や占領によって、ヨーロッパ全体の歴史なるものが、右や左に大きく傾いたのである。

カーライル著『プロシヤ王フリードリッヒ二世』（一八六四年）①

一六八三年太陽王の次男ルイ王太子とバイエルン選帝侯の長女マリア・アンナとの間に生まれたアンジュー公フィリップは、他の王孫とおなじくポーヴィリア公爵や文学者フェヌロンの薫陶を受けた。政務や軍事について教育さたほか、馬術と水泳の訓練もなされたが、生来やや内向的で気弱であったとされる。② 一六世紀以降ハプスブルグ王家が君臨するスペインでは、国王カルロス二世に跡継ぎがなく、又甥にあたるフィリップ後継者に指名された。まもなくヴェルサイユで十七歳のフィリップが即位の宣言をし、翌年マドリッドの王宮へ入洛した。他方オーストリアではハプスブルグ家のカール大公をスペイン国王に擁立し、かねてフランスの膨張政策に抵抗するイギリス、オランダ、ポルトガルがこれに連携する。こうしてヨーロッパ全土がスペイン継承戦争に突入し、以後新王フィリップ五世は国内統一への政策と列強との外交・交戦に忙殺され、一七一三年ユトレヒト条約によってその王位がようやく確立する。この間に彼はサヴォイアの公女マリア・ルイーザと結婚し、後年の国王フェルディナンド六世など四人の王子が出生した。しかし、継承戦争が勃発してまもなく、一七〇二年イタリア遠征の頃からフィリップ五世には躁鬱病の徴候が現れて、虚脱観や厭世観に憑かれ、国事を避けるようになった。こうしてスペイン宮廷の采配は、宰相アルベロニと王妃侍従長オルシニ公妃が掌握するに至る。前者アルベロニは

① Thomas Carlyle, *History of Friedrich the Second, called Frederick the Great*, New York, 1864, volume 1, pp.418-419.

② Henry Kamen, *Philip V of Spain, the King who reigned Twice*, London, 2001, p.6

イタリア人枢機卿としてユトレヒト条約の締結に貢献したあと、ブルボン王権強化のためマドリッドに派遣された。後者オルシニ公妃はフランス膨張政策の一翼を担い、マリア・ルイーザの輿入れに伴ってスペイン宮廷に入ったのである。王妃の侍従長にすぎぬ彼女が、ルイ十四世の信任を後盾として、国政の改革や条約の締結をも左右した。<sup>①</sup>

ユトレヒト条約が締結された翌年二月、王妃マリア・ルイーザが二六歳にして病死した。柔和で快活な彼女は、深い情愛と冷静な判断によってつねにフィリップ五世を補佐し、国民から厚く敬愛されていた。彼女を伴侶とした時期には、国王の精神状態はおおむね平常を維持したと言われる。以下この時期におけるスペイン宮廷については主としてサン・シモン著『回想録』の記述に依拠する。

スペイン王妃マリア・ルイーザは久しく結核に冒され、重病の状態にあった。宮廷医エルヴェシウスによる治療をひたすら彼女は切望し、フランス国王に書簡で招請を懇願した。かねてオルシニ公妃の権勢を知るエルヴェシウスはスペインへの出向を辞退したが、ルイ十四世は彼に嚴命を下した。彼はただちに郵便馬車で出立し、途上での故障に備え、さらに一台の馬車がこれに続いた。(中略)

一七一四年二月十一日エルヴェシウスはマドリッドに到着した。王妃を診察するや、彼は呟いた。助かるとすれば、奇蹟である、と。彼女の聴聞司祭はイエズ会士であった。臨終の秘蹟に至り、絶命と自覚

<sup>①</sup> William Cox, *Memoirs of the Kings of Spain of the House of Bourbon*, London, 1815, volume II, pp.

関哲行ほか編『スペイン史―古代―近世』山川出版社、二〇〇八年。三八二―三八六。

するや、早世した実姉のフランス王太子妃に倣って、イエズ会士に感謝し、ドミニカ修道士に身を委ねた。スペイン国王フィリップ五世は王妃の間での就寝を同月九日からやめる。非凡なる氣力、自覚、信仰を保ちつつ、二月十四日彼女は永眠した。

マリア・ルイーザは遍く敬愛され、スペイン全土は深い悲しみに覆われた。貴賤上下を問わず、あらゆる家族が悲嘆に沈み、国民すべてが哀悼した。これについては後段においてさらに語ろう。国王は深刻な傷手を受けたが、王室全体は比較的冷静であった。狩猟による恋愛と戸外での散策を彼に勧める。そうした外出の途上、国王は王妃の遺体をエスクリアル宮へ移送する葬列に出会った。これを凝視し、行方を送りつつ、彼は狩猟へ赴いたのである。

サン・シモン公爵著『回想録』第十一卷第四章 <sup>①</sup>

フィリップ五世の懇請によってスペイン王宮へ派遣された経験医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスは、赤痢の特効薬イペカ吐剤(吐根)の発明者である。ルイ十四世の王太子ルイ・ド・フランスの赤痢を快癒させた彼は、一六八七年フランス最古の公共医療機関パリ施療院の臨床実験で輝かしい成功を収めた。やがてオランダ育ちの経験医はフランドル方面初代軍医総監に任命され、さらにオルレアン公フィリップの侍医となり、ユトレヒトへの和平交渉をも補佐した。ヴェルサイユのときめく高官に辛辣なサン・シモン公爵であるが、ジャン・アド

<sup>①</sup> Duc de Saint-Simon, *Mémoires sur le Siècle de Louis XIV et la Régence*, par Emile de la Bédollière, Paris, 1857, tome XI, pp. 44-45.

リアンについては卓越した医術だけでなく、市井における医療活動や博愛的行為を惜しみなく称讃した。① 三代にわたるこの名医家にまもなくフランス啓蒙思想の代表的なひとり、クロード・アドリアン・エルヴェシウスが出生する。本論に即してここでは参考までに祖父ジャン・アドリアンのスペイン報告を付記するに止めよう。

オルレアン公侍医ジャン・アドリアン・エルヴェシウスの書簡

宛先 フランス外務長官トルシ

一七一四年二月、マドリッド

憂慮すべき病状を診察するよう、スペイン国王陛下が私を王妃の傍らに案内され、侍医たちからご病気の発端と経過が語られました。王妃の胸部が水腫に侵されている、と私は種々の症状から私は判断しました。体内になんらかの膿瘍が生じた可能性もあります。下腹部を調べると、肝葉に硬化と鈍痛が認められました。〔中略〕少量の硫黄塩を加味して、スイスの創傷薬草を煎じ、王妃に服用して頂くよう、私は侍医たちに提案しました。また、二四時間に二回か三回阿片の投与を繰り返す日が続くので、苦悶を和らげ、少しでも眠らせるために、穀類のタルタルソースと一緒に与えるよう進言しました。〔中略〕王妃の寿命が一日でも長くなる方途を考える以外に、私の時間を有効に使えません。というのは、これを治療できれば、まさに

① 拙稿、経験医 J・A・エルヴェシウスとルイ十四世の軍事・外交―評伝 エルヴェシウス家の人々（その三）

―愛知教育大学ヨーロッパ文化選修『ヨーロッパ』第四号（一九九九年）、三八―四〇、四二―四四頁。

奇蹟であります。①

王妃マリア・ルイーザの早世は、フィリップ五世の精神疾患を悪化させ、国務を停滞させるに至る。この間宮廷での専横を増幅した宰相アルベロニとオルシニ公妃は傷心の国王に、一七一四年九月バルム公国の公女イザベル・ファルネーゼとの再婚を推挙した。これがポルトガル王妃マリアナ・ヴィトリアの実母である。文人カール・イルに啓発され、十九世紀末に伝記『イザベル・ファルネーゼ』を執筆したエドワード・アームストロングは、彼女の出自が高貴な血筋に属するという。

イザベル・ファルネーゼを誕生させ、その脈道をなされるのは、ヨーロッパにおける聖俗最高の血統である。彼女はルネサンス最後の教皇の末裔にして、先代の神聖ローマ帝国皇帝の孫である。ただし、この血筋には他の要素も混入した。ファルネーゼの財産はカルロス五世非嫡出の娘とパウロ三世非嫡出の息子との結婚によるところ大である。本来所有し、譲渡と奪還を繰り返す領地のバルマとピアセンザは、教権と俗権の緩衝地帯であった。教皇庁の封土として認められ、ミラノ公国の支配下にある諸地方とは別格である。しかし、神聖ローマ帝国からの復権要求にたえず曝されていた。

① Jaen Adrien Helvetius, *Lettres à Torcy du février 1714*, dans Louis Lafond, *La Dynastie des Helvetius*, les *remède du roi*, Paris, 1926, pp.57-58.

深窓の従順な乙女と伝えられた彼女は、九月一六日結婚の祝賀をパルムで挙げ、フランスを経てスペインに入国する。国境で出迎える王妃侍従長、オルシニ公妃へこの花嫁が即座に国外追放を命じたのである。イザベル・ファルネーゼの人柄について新たな世評に接したオルシニが、フィリップ五世との婚約解消を画策したとされる。諸国の宮廷を驚愕された筆頭女官の放逐について、サン・シモン著『回想録』の劇的な描写を抄訳する。

マドリッドへ進む新たな王妃イザベル・ファルネーゼのため、スペイン国王は国境に装具、施設、防備を用意した。パルムから宰相アルベロニが彼女に随行し、フランスではサン・エガン公爵が合流した。（中略）十二月二日スペイン国王はガグラハラに到着した。クリスマスを目前にした二三日、オルシニ公妃はそこから七里離れた村落クアドラケへ数名の従者とともに出立した。当日イザベルがそこに宿泊する予定だからである。歓迎を篤く感謝されるとオルシニは自負し、新王妃と一夜を共にし、翌朝彼女の馬車で国王の宿泊地ガグラハラへ先導するつもりでいた。クアドラケに到着するイザベル・ファルネーゼを公妃は出迎える。新王妃の宿舎の真向に同じく宿舎が設けられ、オルシニはそこで待機した。かねて用意した宮廷の正装で身を調べ、新王妃のもとへ近づく。無情にして冷然たる雰囲気公妃を当惑させる。当初彼女は不慣れた新王妃のためと判断し、緊張を和らげようとした。だが、周囲は冷え切ったままである。

① Edward Armstrong, *Elisabeth Farnese*, 1892, London, p.1.

言葉が交わされたが、イザベル・ファルネーゼはすぐさまそれを中断し、公妃の身なりと態度が敬意を欠くと、激しく叱責した。正装で拝謁し、慇懃な態度と鄭重な挨拶を呈したと信じるオルシニは、不当な譴責と驚愕し、慌てて弁明を始める。しかし、こうした対応をれら新王妃は不遜の至りと叫んで、糾弾を続け、衛兵を呼び寄せて、公妃の追放を命じた。（中略）

その場で逮捕されたオルシニ公妃は、衣服や頭巾を替へもせず、防寒の用意も金銭等の所持もなしに、ひとりの侍女とともに馬車へ幽閉される。食物も寝衣もそこにはない。やがては旅立ちの四輪馬車と護衛の將校二名が用意され、彼女は新王妃を出迎えたときの盛装のままである。公妃の抵抗を反逆と感じ、憤怒を倍加したイザベル・ファルネーゼは、即刻国外へ連行するよう指示した。折しもクリスマスの前々日夕刻七時頃、例年スペインでは大地が氷りと雪で覆われ、苦渋な極度の寒冷に襲われる時期であった。

サン・シモン公爵著『回想録』第十二巻第一章 ①

オルシニ公妃追放の底流にはイタリア人宰相アルベロニと新たな王妃の密約が存したと思われる。二一世紀初年に刊行されたスペイン史家ヘンリ・カーメンの労作『フィリップ五世―二度即位したスペイン国王』は、イザベル・ファルネーゼの才幹や事績についても精細である。ば彼女は外国語に堪能で、音楽を愛するだけでなく、乗馬や狩猟をも得意とする女性であった。さきに注目したポルトガル王妃マリアナ・ヴィットリアの多才多才は、

① Duc de Saint-Simon, *Mémoires sur le Siècle de Louis XIV et la Régence*, par Emile de la Bédollière, Paris,

1857, tome XII, pp.4-5.

母親譲りであったことがこれによって判かる。

興入れたスペインの新王妃は二二歳であった。若き日の肖像では美人であるが、その容色は次第に衰える。特筆すべきはイザベル・ファルネーゼが活発で明敏であり、不羈にして豊かな教養を備えたことである。自国のイタリア語はもとより、フランス語とドイツ語に通じた。(彼女の母親はドイツ人である。)スペインへの途上で見かけたモナコ君主の記述によれば、中背の優雅な容姿で、面長の顔に疤痕の跡が見られ、かの女の輝く瞳は、あらゆる事柄を表現できたという。話術も魅力的であって、音楽を熱烈に愛し、乗馬と狩猟もなした。

先妻のマリア・ルイーザと同じく、マドリッドの宮廷で彼女も美意識を変えず、イタリア・フランス風の服飾を保持した。スペイン料理に馴染めず、イタリア・ワインを好み、パルム産のチーズやハムを特命で輸入させた。自身の衣装すべてをイタリアで作らせ、のちにはそれらをフランスへ発注する。王妃専用の騎馬もイタリアから輸入された。演劇の熱烈な愛好者であるイザベル・ファルネーゼは、(解しえぬ言葉で演じる)マドリッドの芝居に満足できず、一七七八年イタリアの劇団を招請し、首都近郊のバルド宮で週三回の上演を許した。これらの創意は洗練された宮廷を築く意義ある布石であって、イベリア半島を訪れる多くの外国人と同様に、彼女もスペイン文化の実際を、田舎染みて偏狭と感じたのである。

カーメン著『フィリッペ五世―二度即位したスペイン国王』(二〇〇一年、ロンドン) ①

① Henry Kamen, *op.cit.*, pp.103-104.

## 第二節 国王フィリッペ五世の重病と歌手ファリネリの音楽療法

興入れたイザベル・ファルネーゼは、アルペロニを腹心として宮廷の実権を掌握し、国内の統一、財政の充実、海軍の強化に努めるとともに、イタリアでの失地回復をめざした。一七一七年スペイン王権は三万人の軍勢によってサルディニア全島を占領させる。さらに一七三三年ポランド継承戦争が勃発するや、フランスと同盟してスペイン艦隊は、オーストリア軍と交戦してナポリを占領した。イザベル・ファルネーゼを実母とする最初の王子カルロスが、派遣軍最高司令官に任命され、同年五月ナポリへ、同じくさらに同年九月バレルモへ入城し、ナポリおよびシチリアの君主と宣言した。①

この間にフィリッペ五世の躁鬱病は発作と鎮静を繰り返して、国政上多大の障害になるとともに、近隣諸国々でも広く噂されるに至った。遺伝的な要素に加えて、難病悪化の原因は、ヨーロッパ列強の凄まじい版図争奪や宮廷に渦巻く内紛・陰謀と推察される。歴史家カーメンは著書『フィリッペ五世―二度即位したスペイン国王』において現代の医学的成果をも摂取しつつ、こうした精神疾患の経緯を辿り、王妃の献身的な介護をも浮彫にする。

さきに指摘したとおり、フィリッペ五世は神経生物学で扱われる深刻な疾患を背負っていた。その病質はなかば遺伝的で、子どもの頃すでにみられる。母方であるバヴァリアのヴィッテルバッハ家を代々悩まし、

① Henry Kamen, *op.cit.*, pp.194-195.

そこから遺伝した可能性が高い。おそらく十歳代前半に進行した疾患が、正常と見なされ、即位した十七歳の時点にも潜伏したのである。フランス宮廷でのマントノン夫人等による記録にも、そうした兆候が誌される。すべて病気のせいであって、ときに非難されると異なり、人格的な欠陥によるのではない。国王は怠惰でも虚弱でもなく、そのように映ずる場合は、精神病が悪化したためである。それは躁鬱病ないし両極性障害であって、躁状態と鬱状態の両極を反復する。比較的早い時期の鬱状態として誌されるのは、一七〇一年マドリッドにおけるものと一七〇二年ナポリにおけるもののみである。マドリッドやナポリではフィリップ五世を精神療法で救う人は皆無であった。対照的にマリイ・ルイーズとの初婚およびイザベル・ファルネーゼとの再婚によって、近親から直接介護を受ける。国王は王妃に縋り、離れようとしなかった。

〔中略〕

一七二六年六月初めフィリップ五世の持病が再発し、数週間続いた。その後しばらく治まり、公式の盛夏フェスティヴァルにも臨席する。だが、イギリス大使がその病気を「発狂」と記述した。深刻な容態と自覚して、国王は勅書を作成し、イザベル・ファルネーゼを摂政に任命した。躊躇なく彼女は王権を掌握し、閣僚とともに国務を遂行する。国王に会うことは、だれにも許されず、聴罪司祭のみ王室に入り、祈祷を捧げる。このとき王太子が初めて枢密会議への出席を認められたのはこのときである。七月に顕著な回復がなされ、国王は王室一家とともに近衛師団を閲兵するとともに闘牛を観劇し、月末にはサン・イルデフォンソ宮に戻った。健康への危惧は国王と王妃の相互依存を絶対的ならしめる。十月フランス大使ローテンブルクとの謁見において、国王の面前でイザベル・ファルネーゼは、ふたりは一心同体であって、王妃の行為と思考は国王のそれらと同一であると声明した。しかし、病状の回復は一時的にすぎず、十月末には深刻な四肢

の障害として再発した。精神的には活発で明瞭のまま、肉体的な機能を喪失する。寝台から起すのに、介護者三名を必要とした。日々国王は幾時間もそこに横臥したままで、何事もなさず、天井を見詰め、無言で唇を動かしている。王妃はその脇に日夜付き添った。〔中略〕

一七三〇年の晩夏フィリップ五世はまたも重い鬱状態に陥り、九月からは寝室に閉じ籠った。彼はだれにも理容をさせず、伸びて乱れたままの毛髪を髪で隠した。こうした有様で外へ出ようとせず、もとより体操などしない。九月初旬王妃や廷臣とともにプエルタ・デ・サンタ・マリアに三週間滞在し、以後そこから移動するのを拒否した。フランス大使によれば、国王はその間六度だけ外出した。三〇メートル離れた河畔まで歩き、そこで佇んでいつも河の流れを見詰めたと言う。愛着する唯一の趣味は、月光に照らされる夜釣りであるが、アルカザル宮とは異なり、当地に養魚池がないので、特異な釣魚となった。国王が夜更けに庭園へ出て、魚の泳ぐ大鉢を侍従はその面前に置く。かくしていつも釣りを楽しむのである。不幸な君主の精神状態に閣僚も廷臣も即応せざるをえなかった。発病の時期には癩癩も強くなる。だれの助言も聴き入れず、いかなる抗弁も容赦しない。一七三〇年九月フィリップ五世は午後十一時から午前二時にかけて枢密会議を開き、そのあとに夕食を済ませ、午前六時頃就寝して午後二時に起床。午後三時に朝のミサを聴き、そのあとで昼食を摂った。翌年一月には午前八時に就寝し、午後四時に起床して朝のミサを聴き、そのあとで昼食を摂るのが通常となった。重症の時期にも国王と寝室を共にしつつイザベル・ファルネーゼは、通常の生活を懸命に維持し、然るべき時刻で万事を処理すべく、信じ難き柔軟性によって發揮した。①

一七三三年頃からフィリップ五世の精神的疾患はさらに募り、死に瀕したと装い、食を絶って、聴罪司祭を呼ぶこともあった。国王としての政務はもとより、以後日々の洗面、調髪、装着を怠り、その状態が数日か数週も続き、ときには一年半に及んだ。あらゆる医薬や治療を試みた王妃イザベル・ファルネーゼは、周囲を陽気にするさまざまな娯楽も提供した。盛大な舞踏会も長時間と緊張感で不首尾となり、一策として子どもに愉快で無邪気な寸劇を宮殿の広間で演じさせた。この笑劇が国王の病状をある程度和らげ、王妃の脳裏には高名なカストラート歌手カルロ・ブロッシ、通称フアリネリの面影が浮かぶ。その玲瓏たる歌声はヨーロッパ全土で讃えられるが、イタリア育ちの彼女がかってそれを直接聴いたのである。① 一七三七年ロンドン滞在中のフアリネリは、ポルトガル大使モンテイジョ伯爵を通じ、王妃イザベル・ファルネーゼの書簡を受け取った。

フィリップ五世の精神疾患を介護するため、イザベル・ファルネーゼは楽しく日々を過せるよう、あわゆる種類の慰安を用意した。大抵はあまりに長時間で、堅苦しい舞踏会を諦めたあと、王妃は内輪の団樂で小さな舞台に子どもたちを登場させた。こうした無邪気で愉快な笑劇が毎週日曜の夕宵に演じられ、国王の病状を緩和するとも思われた。

① Patrick Barbier, *Histoire des Castrats*, Paris, 1989, pp.204-206.

〈参照〉パトリック・バルビエ著、野村正人訳『カストラートの歴史』筑摩書房、一九九九年。

三〇二・三〇三頁

かくも無惨な患者をなんらかの芸術が癒やすのではないか。一層効果的な芸道を捜そう、とイザベル・ファルネーゼと着想する。イタリア育ちの彼女はヨーロッパ全土で称讃されるフアリネリの歌唱にかって接し、その神韻繚渺たる調べを脳裡に刻んでいた。唯一懸念されるのは、国王が生来音楽を好まず、総じて音楽家を蔑視することであった。〔中略〕かくして王妃は、近々スペイン宮廷を訪れるとの返書をロンドンから受け取り、まさしく天使の歌声によって音楽療法の奇蹟が実現することを期待した。

一七三七年八月二五日ラ・グランジェ宮に迎えられたフアリネリは、フィリップ五世の健康状態と日常生活のすべてをほぼ把握していた。イタリア育ちの王妃イザベル・ファルネーゼは、舞台の設定に巧みであった、対照的なふたりの人物、フィリップ五世と歌手フアリネリを合わせるのに、当日の段取りを入念に用意した。初めから対座させるには、国王の反発が懸念される。王妃は切り札を隣室に待機させ、そこから国王の間へ魔法の調べを送ったのである。〔中略〕

声音の魔力と歌唱の魅力を發揮すべく、彼のレパートリからまず数曲が唱され、ついで二十曲あまり美事に歌われるので充分であった。当代最高の歌手による玲瓏で流麗で甘美な旋律を聴く数分のうちに、フィリップ五世の放心した顔面が、幸福な表情に変わり始めた。ふたたび微笑が甦えり、病患のため虚脱した身体を回復させる。数ヶ月宮殿を包む暗雲が、片隅から流れる声音、さらには流麗な調べや躍動的な旋律によって消え去ったと言う。

このとき国王に力が甦えり、フアリネリを呼び寄せ、彼に手を触れて感謝の意を示した。切なる望みとして、これなる病床の枕元でいま一度歌って欲しい、と懇請される。陛下が恢復して、洗面や整髪を済ませ、ふたたび国務を采配することだけが自分の願いと、フアリネリは応えた。いつもながらこうした彼の応対は、



謙虚にして献身的である。この名歌手は国王への対処に周到な用意を調べ、王妃や宮廷の悲願を的確に把握していた。国王恢復の兆候が現れたとき、自身に寄せられる絶大な属望にファリネリは以後応える。

バルビエ著『啓蒙のカストラート歌手、ファリネリ』（バリ、一九九四年）①

さきに引用したバトリック・バルビエ著『啓蒙のカストラート歌手、ファリネリ』など若干の評伝とともに、この声楽家については一九九四年イタリア・フランス・ベルギーの多国籍映画 *FARINELLI*（邦題『カストラート』）が、コルビオ夫妻の脚本・監督によって製作された一九九四年に製作された。ヨーロッパ文化の伝統と特質を広く認識させるべく、欧州連合の映画振興政策に助成されたものであるが、去勢されたファリネリの複雑な人間関係やヨーロッパ巡業での異常な反響などが織り込まれ、斬新な演出に出来事の筋道をやや把握し難い。しかし、以上のようなスペイン・ブルボン王家との係りや奇蹟的な音楽療法については、二〇一五年初演のミュージカル『ファリネリと王様』が直裁かつ明快である。

クレア・ヴァン・カンベンの脚本に基づくこの作品は、まずテムズ河畔のシェイクスピア・グロブ座・ワナメイカー劇場で同年二月十一日初日を迎え、同年九月中旬から十二月初めまでウエストエンドのデューク・オブ・ヨーク劇場で引き継がれる。さらに『ファリネリと王様』は二〇一七年十二月五日からブロードウェイのベラスコ劇場において演出ジョン・ドーヴによって公演され、翌年三月二五日に至るロングランを記録し、第七二回トニー賞諸部門にノミネイトされた。ここでは劇作の終末近い場面、危機を脱した国王夫妻が、ファリネリを

① Patrook Barbier, *Farinelli, le castrat de lumières*, Paris, 1994, pp.113-116.

長期にスペインに引き留める場面を訳出する。療養先のラ・グランハ離宮で玲瓏な詠唱によってフィリップ五世は快方に導かれ、平常の生活を取り戻したが、マオリッド王宮での政務復帰にはなお障害と不安が横たわる。

#### ミュージカル『ファリネリと王様』

二〇一七年十二月、ブロードウェイ、ベラスコ劇場。

脚本 クレア・ヴァン・カンベン

演出 ジョン・ドーヴ、

配役 スペイン国王フィリップ五世… マーク・ライラン

スペイン王妃イザベル・ファルネーゼ… メロディ・グロウヴ

高名な歌手ファリネリ

… (演技) サム・クラウス

… (歌唱) イエスティン・デエイヴィス／ジェイムズ・ハール／エリック・ユレナス

#### 第二幕第五場

一七三七年八月二六日、セゴヴィア近郊ラ・グランハ離宮の広大な緑園。

〔遊歩する国王フィリップ五世に、歌手ファリネリが別れの挨拶を始める。そこへ王妃イザベルが現れる。〕  
フィリップ五世 … イザベルよ。ファリネリに訴えよ！去ってはならぬ、我らから離れてならぬ、と！  
王妃イザベル … (ファリネリに) 立ち去らないでください！

ファリネリ…陛下はご健康を充分に恢復されたと存じます。  
フィリップ五世…恢復した？ こんでもない。

王妃イザベル…去つてはなりません。病状をお考えください。

フィリップ五世…なお留まることを、余は命令できる。

ファリネリ…私を尊重されるなら、命令できないはずです。

フィリップ五世…尊重する以前に、そなたの歌をひたすら聴きたいのだ。どうか余のため歌ってほしい。長き暗闇の歲月、わが心は痛苦に沈潜し、癒されるにはそなたの歌が不可欠である。これを承知で、見棄てようとするのか。

ファリネリは黙り込む。

王妃イザベル…雨のあと暁の草花は麗しい。それでも日没後まで凋まぬのはすくない。

ファリネリ…なにとぞ陛下には私をお赦してください。

〔ここでファリネリは退場し、さらにいくつかの場面が続いたあと、夕刻の対話が始まる。〕

フィリップ五世が現れる。彼は放心した様相で、眩しそうに手を翳す。

フィリップ五世…今夜はとても眠れない。

ファリネリ…予定の船舶は明日早朝に出港します。

フィリップ五世…予定どおり、去るがよい。簡素に出立してほしい。

ファリネリ…簡素に旅立ちます。

フィリップ五世…旅立ちとは縁の切れ目よ！

沈黙が続く。

ファリネリ…留まることに決意しました。陛下がお望みならば……。

フィリップ五世…ああ、居てくれるのか。

ファリネリ…春までなら。

フィリップ五世…春まで、と。

ファリネリ…春には去らねばなりません。

王妃イザベル…判りました。春に出立するのですね。宰相ラ・クワドラに伝えましょう。必要な事柄をすべて準備するはずですよ。

フィリップ五世…ファリネリよ、余のため冬中歌ってくれるのか。

王妃イザベル…春までなのよ！

フィリップ五世…めでたし、めでたし！立ち去らぬ、と誓ってくれたのだ。

王妃イザベル…（フィリップ五世に）離れぬ、とファリネリは約束しました。夏が終わり、冷えてきました。

王妃イザベルが退場する。

フィリップ五世…ファリネリよ、余らは明日マドリッドに帰る。緑園のわが茅屋にすぎま野鼠が入り

込み、住みつくであろう。身を潜めし洞穴は、これら樹木の天蓋に覆われ、繁茂する枝葉で月光を仰ぐのも困難となろう。余らはつねに戦乱の最中にいる。争闘を逃れるすべはない。このとき星空に輝く緑林から歌声を聴かせて欲しい。愛唱されるどの曲でもよい。いついつまでも、わが命の統

くかぎり、くりかえし繰り返し、そなたの歌を聴く必要を感じるのだ。①

やがてフィリッペ五世はエスコウリアル宮に復帰し、従来のとおり実権は王妃に委ねつつ、君主としての政務に就いた。マドリッド残留を懇請されたフアリネリは国王の居間で連夜数曲を歌い、二十年間ブルボン王家の悲願に応える。まもなく彼は重臣の地位に特任され、君主の難病を癒やししながら、宮廷の音楽事業を統率するに至った。一七三八年謝肉祭には改修直後のカノス・デル・ペラル劇場でフアリネリの親友メタスタージオの台本『歌劇デメトリオ』を上演させる。また、この会場を手狭に感じて彼は、ブエン・レティロ宮廷劇場を増築させ、同年七月コルセリ作曲『インドにおけるアレクサンドル大王』を組む。ここでは以後イタリア歌劇の長期公演が多々企画され、ヨーロッパ有数の歌劇場と評価されるに至る。一七四〇年イザベル・ファルネーゼの第二王子、フィリッペ・デ・ブルボンの結婚を祝して、当代の著名な声楽家、すなわちカストラートのカファレリ、テノールのアニヴァリノ、女性歌手のフランシネリおよびアンナ・ベルージがセレナーデで共演した。②

この間にヨーロッパ列強の角逐はさらに激化し、一七四〇年神聖ローマ皇帝カール六世の逝去によってオーストリア継承戦争が勃発する。三〇年前ユトレヒト条約によってミラノ公国をオーストリアに割譲したスペインは、これを奪還すべくフランスと同盟し、一七四一年スペイン⇨ナポリ連合軍を北イタリアに侵攻させた。翌々年王子フィリッペ・デ・ブルボンは、スペイン⇨フランス連合軍を統率してミラノを占領し、ロンバルディア全域へ

① Claire van Kampen, *Farinelli and the King*, London, 2018, pp.44, 63-64, 67-68.

② Barbier, *Farinelli*, pp.135-136.

の統治を宣言して即位の儀式を挙行了た。① リード・ブラウニングの労作『オーストリア継承戦争』は、十八世紀中葉におけるスペイン・ブルボン王家の勢威を重視しつつ、そのイタリア進攻に焦点を向ける。

ここでは第一の外交政策がイタリアに向けられた。フィリッペ五世とイタリア人王妃イザベル・ファルネーゼは、実子であるカルロス王子とフィリッペ王子をイタリアの有力な統治者にするため、二十年間全力を傾けた。ポーランド継承戦争を奇貨としてカルロス王子は両シチリア国王カルロス七世として戴冠する。とはいえ、手痛い代償としてオーストリアにやむなく譲渡したのが、ファルネーゼ家の領有、豊穡なバルマッピアチェンツァ公国であった。長男カルロス王子を即位させたフィリッペ五世夫妻は、次男のフィリッペ王子をもイタリアの君主とすべく策略し、オーストリアに譲渡したバルマッピアチェンツァ公国を標的に、その王位継承権を取得させた。こうした策動を陰で推進したが、イザベル・ファルネーゼである。彼女の秘めるわが子への大望は、ヨーロッパ外交筋でいつも評判になった。

ブラウニング著『オーストリア継承戦争』(ニューヨーク、一九九三年) ②

カーライルの読まれざる大著『評伝 プロシヤ王フリードリッヒ二世』には、この戦争に係わる女傑としてマリア・テレジアやエカテリーナ二世とともに、イザベル・ファルネーゼの動向が喝破される。フリードリッヒ・

① Read Browning, *The War of the Austrian Succession*, New York, 1993, p.239.

② *Ibid.* p.20

エンゲルスおよび夏目漱石に敬慕される彼は、英国の宿敵スペインの王妃を海神と呼称した。海神が水辺の生きものを守護するとともに、ときには嵐を呼び立て、戦乱や海難を惹き起すのと同じく、病弱な国王を献身的に補佐する彼女が、ここでは乱世の梟雄として描かれる。

己れの第一王子カルロスがかって領有したミラノ一帯を取り戻し、第二王子フィリップ・デ・ブルボンの所領とすることが、海神イザベル・ファルネーゼの野望なのである。〔中略〕

王妃に牛耳られるスペイン宮廷は、この戦争の動向を虎視眈々と見詰めた。眼前の障害が除かれるまで手綱を引き締めて待とう。一七四一年夏に彼女はバルセロナに兵員一万五千を派遣したが、英国艦隊の封鎖によって如何し難い。軍事的要地カディスにも船舶と軍艦を待機させたが、そこも嚴重に封鎖された。フランス宰相フルーリ枢機卿の援軍遅延も心外であるが、さらなる苦境は英国艦隊であって、提督ニコラス・ハドックの七四門艦がカディスを封鎖したのである。〔中略〕

一七四二年の十月中旬カデスの灯台から監視するスペイン将校が、これら七四門艦がどこにいるか、とある日戸惑った。海面から消え、どこにも見当たらぬ。任務への不満か、不祥事の実案か、艦隊での封鎖を指揮するアルビオンが、背信にも使命を放棄し、ジブラルタルへ撤退したのである。思うにマキアベリ流の変わり身であって、これについてハドックなど責任者への査問もなかった。

七四門艦が去り、順風が戻るや、スペインの海神はただちに軍事輸送艦をバルセルナに出航させた。そこで兵員一万五千が乗り組み、フランスも強く支援する。英国海軍の攻撃は微弱であり、同年十二月中旬ジェノア沿岸への上陸を完了した。「兵士らよ、ミラノ一帯へ侵攻せよ！」アルプスへの山道を警護するサルデ

ニア国王シャルル・エマヌエル三世も、この勢いに防備を解き、スペインとの同盟に踏み切った。①

このときスペインの勢力躍進の脅威を感じたルイ十五世は、ノアイエ公爵アドリアン・マウリスをエスコリアル宮へ特使を派遣し、北イタリアへの版図拡大を牽制した。同公爵の外交文書には困難な交渉の経緯とともに、最晩年におけるフィリップ五世の様子が伝えられる。コックス著『ブルボン王朝スペイン国王列伝』を再度引用する。

西国の信頼を回復すべく、ノアイエ公爵は使節としてふたたびマドリッドに遣わされ、イタリアにおける形勢逆転に照して、ミラノ領有をフィリップ・デ・ブルボン王子に断念させるよう進言させた。同公爵の書簡と報告にはスペイン宮廷の活字が綴られ、その時期フィリップ五世は鬱状態に先立つ躁状態であったことが興味深い。「王宮以外で」とノアイエ公爵は誌す。「お姿に接したことはないのですが、スペイン国王はかなり変られました。以前より陛下は肥満され、短身になられたようです。運動不足のためらしく、起立や歩行ご苦しいように拝見しました。理解力については、お変わりありません。陛下はいつも良き判断を示され、みずから決すべき事柄を、公正かつ周到に処理されます。為したこと、眺めたこと、読んだことをすべて忘れず、さまざまな出来事を楽しく回想されました」〔中略〕征服の野望とフランス王権から非難されたことを心外としながら、フィリップ五世は申されました。「フォンテーヌブロー条約で認められたミラノお

よびモンタナ領有を、我らは潔く放棄しよう。フィリップ・デ・ブルボン王子がその代償を得られるよう、フランスの国王が友情を発揮されるものと期待する。王妃イザベル・ファルネーゼを熱愛し、誇りとする余は父祖伝来の遺産、バルマの領有を定めた条約を放棄することはできない。」

コックス著、前掲。①

一七四八年エクス・ラ・シャベル条約によってオーストリア継承戦争は終結し、マリア・テレジアのハプスブル家相続と夫君フランツ一世の神聖ローマ皇帝即位が承認された。フランスの掣肘によってスペインの北イタリア領有は阻止され、ミラノはオーストリアに返還された。代償としてフィリップ・デ・ブルボンはバルム公主に即位し、啓蒙的な政治改革を実施する。ダランベールなど百科全書派と親交を結び、哲学者コンディヤックを王室の師<sup>し</sup>傳<sup>わ</sup>に招請するのはこの君主である。

### 第三節、大震災への国際的支援と

#### フェルディナンド六世治下の宮廷音楽

① Coxé, *op.cit.*, volume II, pp.376-377, 381.

条約の締結を待たず、一七四六年にフィリップ五世は逝去し、前妻マリア・ルイーザの遺児、王太子フェルディナンドが王座に就いた。二度にわたる在位、四六年間の長きを通し、たえず戦乱に明け暮れた先王と異なり、温和な気質の彼は、平和の維持と学芸の振興に務めた。しかし、かかるフェルディナンド六世にも即位後まもなく遺伝的な精神疾患の病状が現れ、狩猟や音楽によって鬱病を癒やす工夫もなされた。容姿には恵まれぬものの、王妃マリア・バルバラは魅力的な人柄で、明敏な知性と豊かな感受性を備え、病弱な国王をつねに補佐した。専制君主ジョアン五世の長女として彼女は、娘時代から作曲家ドメニコ・スカルラッティに師事して、ハーブシコードの名手であり、スペイン宮廷では教会音楽をも作曲する。① かねてファリネリはフェルディナンド六世夫妻から敬愛され、引き続きマドリッドでの在留を懇請され、国王の傍らで王妃および聴聞司祭に次いでもっとも信頼される隨身となった。以後さらに十余年彼は毎夕君主に歌唱を捧げ、王権の祝祭行事や音楽事業を統率する。この国におけるオペラの振興は、一七〇三年イタリア歌劇団の招請とブエン・レティロ宮コリセオ劇場の建設に始まる。一七三七年初めにはイザベル・ファルネーゼの側近、スペイン駐在バルム大使スコッティ侯爵の企画によって同劇場の改築とともに、マドリッド都心部におけるカノス・デル・ペラル劇場の再建がすでに着手されていた。ファリネリの提言によってコリセオ劇場の装飾と舞台美術を端麗にするため、ヴェネチア派の代表的画家ヨコポ・マイゴーニを招き、宮廷画家として処遇させる。②

① Coxé, *op.cit.*, volume IV, pp.17-19.

Ralph Kirkpatrick, *Domenico Scarlatti*, USA, 1953, p.72.

② Barbier, *Farinelli*, pp.134-136.

マドリッドへ招請された作曲家のなかで、フランセスコ・コルセリがもっとも著名である。一七〇五年バルム公国で生まれた彼は、ファルネーゼ大公に庇護され、ステカタ・サンタ・マリア大寺院の礼拝堂楽長を勤めた。やがてイザベル・ファルネーゼの要望により一七三四年宮廷音楽家および王室師傳として着任し、一七三八年彼女の長男シャルル・デ・ブルボン王子とザクセン選帝侯の長女マリ・アメリエとの結婚を祝し、『インドにおけるアレキサンドル大王』を作曲した。<sup>①</sup> また、ナポリで生まれたオヴァンニ・バチスタ・メレは、スペイン各地での下積みを経て、一七四六年ファリネリの推挙によって宮廷作曲家の地位を確保した。一七四六年ナポリの謝肉祭で処女作『偽れる未亡人』を上演したニコラ・コンフォルトは、オーストリア皇妃マリア・テレジアのためカンタータを、またナポリ国王カルロス三世に歌劇を作曲したあと、一七五五年スペイン宮廷に迎えられた。

<sup>②</sup> ファリネリに選抜される声楽陣も豪華である。一七四〇年フィリッペ王子の誕生日を祝うセレナーデには、著名なカストラート歌手カッファレリとラーフの好敵手、テノール歌手アニバリノがソプラノの歌姫フランチネーニとアンナ・ペルージと共演した。ヴェネチア謝肉祭におけるメタスタージオ脚本、パンパーニ作曲の歌劇『皇帝ティトスの慈悲』などの公演で称讃を博したテレサ・カステイリニが、マドリッドに到着したのは一七四八年の盛夏である。ファリネリの薫陶のもとにこの地で彼女はさらに技を磨き、短期の里帰りを含め、以後十年間ス

<sup>①</sup> Francesco Corselli et Giovanni Battista Mele, *Opera Baroque, online*.

Nicola Conforto, *Wikipedia, online*.

<sup>②</sup> Barbier, *op. cit.*, pp. 134-135, 151-152.

ペインに在留する。<sup>①</sup> 一七五〇年四月ブルボン王家の第三王女マリア・アントニアがサヴォア公主アメデ三世と華燭の縁を挙げ、王家の慶事を祝してブエン・レティロ宮コロセオ劇場で、脚本メタスタージオおよび作曲コルセリによる歌劇『アジロー・ダモーレ』が上演された。ファリネリはこれに出演する歌手を指名するだけでなく、建築家と芸家に劇場の改修を命じ、雪花石膏やアルリカ産大理石を資材として、客席、円柱、欄干、柱頭、等々を一新させた。<sup>②</sup>

経済改革を推進した宰相カルバハール・イ・ランカステルなど有能な政治家とともに、彼は声楽家ファリネリにも王政への参与を要請される。

フェルディナンド六世治下の宮廷要人としてファリネリを逸することはできない。なかでも王妃への影響力は強く、外国人による戯画のなかには彼が宰相と描かれるものもある。〔中略〕

当時の王妃イザベル・ファルネーゼに招請されたこの音楽家は、国王フィリッペ五世を病床から立ち直らせ、洗面と着衣を自力でさせ、さらには国事への執務を可能にした。ファリネリを受け入れた時点から国王の精神疾患は快方に向ったのである。この奇蹟から声楽家への寵愛が始まった。彼は同じ調べ数曲を連夜スベイン国王の前で歌い、二千ポンドの年収と種々の恩賜品を授けられた。王太子夫妻たるフェルディナンドとバルバラはともに熱烈な音楽愛好家であり、おなじくファリネリに傾倒した。

<sup>①</sup> Barbier, *op.cit.*, pp. 136, 155-156.

<sup>②</sup> Barbier, *op. cit.*, pp. 164-165.

フェルディナンド六世の即位によってカストラート歌手への敬愛と尊重は一層深まり、カラトラバ騎士団叙勲者および王立歌劇場座長として宮廷祭事の統率者となった。フエン・レティロの庭園に典雅な劇場が造営され、声楽家、舞踊家、演出家が各国から集められる。フアリネリの統轄のもとに首都と王宮の楼閣は、相繼ぐ祝祭で輝き、ヨーロッパ屈指の壮観のひとつとなった。アランジエス宮殿におけるテージョ河畔の豪華な音楽会でも、彼の才幹と感性が遺憾なく發揮された。

コックス著、前掲。①

スペイン宮廷で果たされた彼の音楽活動については、前述の評伝『啓蒙のカストラート歌手、フアリネリ』においてバルビエは委細に語るが、別の著書『カストラートの歴史』では名歌手の政治的参与を手短かながら具体的に記述する。

歌劇の企画と国王居室での歌唱に加えて、フアリネリは相当の政治的・行政的役割を担った。国王と王妃に支障あるときは来賓を接待し、国王の特別顧問に任じられ、高位高官に列して、重要な事業を指揮した。たとえば、フエン・レティロ宮殿やアラソフェス宮の内部装飾や悪臭に満ちたテージョ河沼地の浄化がそれである。これなる大河については土壌を改良して河底を洗い清めので、豪華船を造らせた国王一家が、アラソフェス一帯の清らかな水上を滑走することも可能となった。

① Armstrong, *op.cit.*, pp.390-391.

バルビエ著『カストラートの歴史』①

一七四六年に即位したフェルディナンド六世夫妻は義母であるイザベル・ファルネーゼの辣腕と容喙を、つねに警戒し、双方の不和はフアリネリの心遣いで辛くも緩和されていた。一七四七年外国勢力との密議を科として、王太后にマドリッドからの追放が命じられる。蟄居先の選定を迫られた彼女は、フィリッペ五世ゆかりの地、セゴビア近郊のラ・グランハ宮を選び、毎年命日にそこで亡夫を追悼すると語った。リスボンから長女マリアナ・ヴィトリアの震災書簡が急送される前年、一七五四年のイザベル・ファルネーゼについてつぎのように伝えられる。

生涯の残りを過ごす隠遁の牢屋として、スペイン全土のなかから選んだラ・グランハ宮にイザベル・ファルネーゼは閉塞し、八年間一度も屋外へ出ていない、とヴェネチア大使ルジーニは一七五四年二月に報告した。「宮廷の政務から外されているが、彼女は高雅な生活様式、慈愛深く快活な態度、傑出した精神的諸能力を保持して、ありし日のお姿と変わらず、運命の転変によっては、なお返り咲くとも感じられた。

アームストロング著『スペインの荒神、イザベル・ファルネーゼ』②

① Patrick Barbier, *Histoire des Castrats*, Paris, 1889, p.207.

〔参照〕パトリック・バルビエ著、野村正人訳『カストラートの歴史』筑摩書房、一九九九年。三〇六頁。

② Armstrong, *op.cit.*, p.392.

一七五五年十一月一日リスボンを壊滅させた巨大地震は、マドリッドをも震撼し、スペイン南部の沿岸部に多大の被害を惹起した。エスコリアル宮の一部も損傷を受け、国王夫妻もしばらく屋外に避難し、夕刻王宮で防災祈願の盛儀を行った。震災の凄絶を告げるマリアナ・ヴィトリアの急報が届き、スペイン王権がポルトガルへの救災支援を指令してまもなく、国境を越えた難民の群れがマドリッドへも次々と流入し、生きるすべをリスボンで絶たれた在留音楽家もそこに含まれた。バルビエ著『啓蒙のカストラート歌手、ファリネリ』にはこれらイタリア人の艱苦とファリネリによる救援が簡潔に語られる。

(ポルトガルでは) ジョアン五世のもとで華麗な宮廷文化が成立し、歌劇をはじめさまざまな音楽が脚光を浴びた。長男であるジョゼ一世は敏腕な宰相ポルバルに補佐されて、その政策と栄光を継続する。カトリック教国の禁令としてここでは女性が舞台上に立てず、すべての女役はカストラートかテノールが務めた。かくして一時的に一七五二年から一七五五年まで著名なカストラートの大半が、リスボンに集まった。

ファリネリと同じく天使の歌声とヨーロッパで称讃されるカストラート、すなわちカファレリ、ジジエロ、マンズオリ、バルビが、テノールであるラーフとともに、一七五五年三月三十一日王妃マリアナ・ヴィットリア(フィリッペ五世とイザベル・ファルネーゼの娘)の誕生日に出演した。

王都を壊滅させ、四万人の命を奪った同年十一月一日の地震は、これら留声音楽家への契約に止めを刺した。もはやセレナーデを催す状況ではない。敬虔にもこの日サンタレムへの参詣に急ぎ出立したカファレリは、イタリアで隠遁し、もはや舞台上で歌わぬ、と神へ誓願した。

王妃の身内全員が危機に襲われたことも含め、大地震の急報はスペイン宮廷を愕然とさせた。すべてを喪失した不幸な家族が、やがてマドリッドへ日々流入し、生きる手立てを求める。これら避難民の群れには多数のイタリア人音楽家も含まれ、彼らはスペインで活動できることを切望した。「彼方からの音楽家が」とイギリス大使(ベンジャミン・キーン)は証言する。「身を飾るものもなく、日々ここに殺到する。」こうした被災者を経済的に援助するファリネリは、然るべき場で彼らに仕事が与えられるよう尽力した。

(地震以前にスペインへ移動した) テノール歌手ラーフは別として、混然たる越境者のなかにはカストラート歌手のマンズオリとジジエロも見出された。つとに一七五〇年から一七五二年までマドリッドに滞在したマンズオリは

これ以後さらに四年間在留する。やがて帰国の際には数々のダイヤモンドと貴重な贈物を下賜された。一タアンコールへの喝采に応じてソプラノ歌手テレザ・カステリーニとの二重唱を演じた褒賞に黄金の小箱を頂き、光栄にも彼とそその一座の舞台が国王・王妃の上覧に供された。また、(愛すべき)ジジエロは宮廷の寵児となり、国王や王妃の広間でしばしば歌った。①

マドリッド一帯の破壊は軽少であったが、セヴィリアなどアンダルシア地方は巨大地震によって甚大な被害に曝された。十一月四日宮廷に予定された歌劇の初演、脚本ベドロ・メタスタシオ、作曲ニコロ・コンフォルト『女王ニテティ』の披露をスペイン宮廷は翌年に延期する。これなる戯曲の著者は、十八世紀イタリアの代表的な脚



本家であつて、ファリネリのもつとも親密な友人であつた。一七二〇年神聖ローマ皇帝カルロス六世の誕生日祝賀としてセレナーデ『アンジェリカとメドーレ』のナポリ公演で初舞台を踏んだファリネリは、当日台本作者メタスタシオと知り合い、一七三二年には彼の支援によってウイーン宮廷での供覧をも果たした。九歳年長の脚本家との親交は晩年まで続き、一七四七年から一七八二年までにの書簡は約一五〇通に達する。① 一七五五年十二月五日ウイーンから発信されたファリネリ宛書簡にはリスボン大地震の証言に接したメタスタシオの絶句が綴られる。

メタスタシオ 一七五五年ファリネリ宛書簡(第十四)

発信、一七五五年十二月五日、ウイーン

親愛なるゲメーロよ、九月十日付(ママ)そなたの書簡がいかにも数多く様々な情動を喚起したことが。愛情、慈愛、混迷、感謝、恐怖、驚異、その他胸に溢れ、筆舌に尽きぬ感情は千余にも達する。悲運なるリスボンの凄絶な艱苦が、余の心底をも揺るがした。なんたる凄惨!なんたる懲罰!なんたる惨苦!哀れなる人類よ!だが、これらあらゆる恐怖と悲嘆が吹き荒ぶ嵐のなかで、神慮によつてそなたの慈愛深き君主には、然るべき活路が開かれ、発露として偉大にして感嘆すべき御心を駆使される事実に、余はいささか安堵を感じる。この破局に際して君主がすでになされ、いまま果されつつある事業は、『テイトス』あるいは『アレクサンドルス』で余が記述した詩人の幻想にも劣らぬと言える。親愛なるゲメーロよ、これらは人間本性に

① Barbier, *op. cit.*, pp. 30-31, 48-49, 151-152.

栄光をもたらす事績である。僥倖かな、神の定めた人物が現れ、全人類の栄光をかく成し遂げる。

さて、こうした悲劇的事変のただ中で、そなたの崇敬すべき君主が、余の恭順と懇請を許容される模様であらうか。無二の寛仁、類稀な恩恵に浴するとは!惜しみなき慈善を賜ることによつて、余の念願は成就する。親愛なるゲメーロよ、余の念願であるからには、そなたの偉大な君主が篤く処遇して、世にも不遜な人物を抱えた、と悔やまれぬよう努力したい。

予定された祝祭行事をそなたの敬虔なる君主が延期された英断に敬意を捧げる。まさしく高邁な御心ぬに相応しい寛仁なご配慮である。神の怒りが鎮静し、人心が静穏に戻る暁に、余の新作をそなたの思うままに演出して頂きたい。そなた以上に親密かつ美事になしうる手腕は、ありえぬからである。①

一七三〇年ハプスブルグの宮廷詩人として招請されたメタスタシオは、以後二十余のオペラ台本と多数のセレナーナ歌詞等を執筆し、たとえば歌劇『皇帝テイトスの慈悲』は、一世紀の間にモーツァルトを含む五人の音楽家によつて作曲が付され、五七の都市で一二〇あまりの公演が行われた。しかし、平民出身の彼にウイーンの貴族社会は閉ざされ、強力な支援者にして親密な間柄にあるアルサン伯爵夫人マリア・アンナが一七五五年三月に逝去して、困窮する事態になった。この時期におけるファリネリ宛書簡には、ポルトガル王権からの経済

① *Lettere del Signor Abate Pietro Metastasio, Tomo Quinto Nizza, 1787*, pp. 16-17.

的援助に深謝する文言が多い。① フェルナンド六世の即位直後から宮廷歌劇の刷新に着手したファリネリは、専属脚本家の重要性を痛感し、ウイーン在住のメタスタシオに、すでに作曲を付され、公演がなされた既成の作品とともに、新たに執筆される脚本をもマドリッドへ届けるよう懇請した。② 右記の一七五五年十二月五日付の書簡は、こうした契約および支援を継続との約束を喜ぶとともに、『王女ニテティ』の初演を中止ではなく、延期と定めた配慮に感謝したものである。なお、この間に綴られたファリネリからのメタスタシオ宛書簡は、凄まじい震災の報告をも含め、残念にも保存されていない。

一七五五年十一月四日、すなわち防疫の守護聖人カルロ・ボロメオを讃える祭日に予定された『王女ニテティ』の初演は、リスボン大地震の震撼によって延期され、十カ月後の九月二三日および二四日、国王の誕生日を祝賀して実現した。ファリネリの企画と演出によって、八年来の専属歌手カステイリニはもとより、テージョ王立歌劇場柿落しの主役ラーフ、リスボン大地震で被災したヴェローニも登場する。③ 当日配布されたリヴレットの記述を試訳する。

① 水谷彰良著『新イタリア・オペラ史』音楽の友社、二〇一五年。一一〇・一一一頁。

*Encyclopaedia Britannica 1911, Metastasio, online.*

Burney, *op.cit.*, volume II, pp.138-140.

② Barbieri, *op.cit.*, p.151.

③ Emilio Cotarelo y Mori, *Orígenes y Establecimiento de la Opera en España hasta 1800*, Madrid, 1917. pp.174-175.

### 歌劇『王女ニテティ』

王妃陛下の御意により

カトリック教国（スペイン）国王フェルディナンド六世陛下の輝かしき誕生日を祝して

一七五六年ピエン・レティロ宮コリセオ王立劇場において上演。

監督：カルロ・プロシィ・ファリネリ

脚本：ペドロ・メタスタシオの新作、四行詩『王女ニテティ』

この台本はファリネリの依頼により書き下された。作曲：ニコロ・コンフォルト、ナポリで活躍。

装飾：フランシスコ・バタジオリ、モデーナの著名画家

#### 配役

アマーシス（エジプトの王）：アントン・ラーフ、ドイツ出身

サメーテス（エジプトの王子で、ベローエを愛す）：フェリツペ・エリージ、ローマ出身

ベローエ（羊飼）：マクダレーナ・バリージ、フィレンチェ出身

ニテティ（サメーテスの異母妹で、密かに彼を愛す）：テレーザ・カステリーニ、ミラノ出身、スペイン王

室歌手

アメノフィス（シリアの王で、密かにニテティを愛す）：マヌエル・コルナチーニ、ミラノ出身

一七五八年八月二七日王妃マリア・バルバラはアランジェズ宮で病死し、その愁傷によってフェルディナンド六世の鬱病は極度に悪化した。スペイン君主の重篤を受けて、後継者擁立の策謀にイギリスとフランスが拮抗する。翌年八月十日にフェルディナンド六世は四七歳で逝去し、閉塞中の王太后イザベル・ファルネーゼが摂政が任命され、同月十七日民衆の歓呼を受けてマドリッド王宮へ復帰した。外交面での発言力を保持し、かねてフランス王権との提携強化を図った彼女が、ナポリ・シチリア国王、実子のカルロスのスペイン王位継承を推進したのである。② 同年十月彼は新王カルロス三世として即位し、以後三十年に及ぶ統治はスペインにおける代表的な啓蒙君主と評価される。

王権に就いたカルロス三世と王妃アメリアは王太后イザベル・ファルネーゼの剛腕と介入を警戒し、鄭重に扱いつつ、国政から遠ざけた。イザベル・ファルネーゼおよび先王夫妻の側近であった声楽家ファリネリは、年金支給の継続を保証されつつ、国外への即刻退去を命じられる。一七六〇年五五歳の彼は、バルセロナ港からテノール歌手ラーフとともに帰国の途に就いた。他方ふたたびラ・グランハ宮へ蟄居したイザベル・ファルネーゼ

① Pietro Metastasio, *Niteti, Opera Omnia, online*.

Emilio Cotarelo y Mori, *op.cit.*, p.175.

② Coxé, *op.cit.*, volume IV, pp.214-216.  
Armstrong, *op.cit.*, pp. 393-394.

は、なかば盲目となりながら、慈善事業に打ち込み、なおも七年間生き続ける。①

一七七〇年大著『古代から近代に至る音楽通史』を執筆中のシャルル・ブルネイは、フランス、スイス、イタリアを周遊し、ポローニャ近郊のファリネリを訪問した。スペインから帰国し、ナポリで熱烈な歓迎を受けた伝説の歌手は、一七六一年からその地で閑静な別荘に隠棲したのである。ウイーンの革新的作曲家グルックは一七六三年に、またオーストリア皇帝ヨゼフ二世は一七六九年にこの山房を訪れた。② ファリネリとブルネイの会見については、後者の紀行『フランスおよびイタリアにおける音楽の現況』が詳細である。

（一七七〇年八月）二五日土曜日 ファリネリ殿の隠棲を訪ねる喜悅に恵まれた。スペインから帰国されたのち、ポローニアから一マイル離れた近郊で、なお設備なかばの山荘に住われる。マルチニ神父に同伴して夕食を共にするよう招待され、かくも傑出したおふたりに同席できる稀有な幸運を感激しつつ記録せざるをえない。

歌手としての引退がすでに久しいものの、ファリネリはハーブシコードとヴィオラ・ダモーレの奏楽にひとり興じ、諸国で製作された沢山のハーブシコードを所有した。〔中略〕愛用されるひとつはさきのスペイン王妃マリア・バルバラから授けられたものである。この王妃はポルトガルおよびスペインにおいてスカル

① Barbier, *op.cit.*, pp.192-196.

Armstrong, *op.cit.*, p. 395,

② Barbier, *op.cit.*, pp.212-214.

ラッチに師事し、後者は彼女のためふたつの教本を作曲した。

高名な名馬チャイルダーが他のいかなる競走馬をも圧倒するように、ファリネリは他のいかなる歌手をも凌駕する。絶妙の旋律だけでなく、あらゆる非凡な歌手のあらゆる美点が、ここに凝結する。その声音は力強さ、心優しき、緊迫感を湛え、その調べは甘美に、優雅に、闊達に進む。まさしく人類の歴史における古今無双の力量が、彼に備わる。これに接するだれしも、学あるものも、無知なる者も、親しき者も仇なる者も、魅了されて陶然となる。

こうした天稟を称えられつつファリネリは一七三七年スペインへ赴いた。来シーズンのオペラ公演について貴族階級と契約し、すぐにも英国へ帰るつもりであった。往路パリで彼はフランス国王の御前で歌い、リコポーニによれば、当時イタリア音楽を嫌ったフランス人をも魅了した。しかし、スペインの国王・王妃のもとで歌唱した最初の日に、宮廷の要務に就くよう懇請され、以後ながくそこに留まって、公衆の前で歌うことをすべて固辞した。そのとき定められた彼の年俸は英貨にして二千ポンドとされる。

「スペイン宮廷に在留して」とファリネリは私に語った。「フィリップ五世が存命する最初の十年間は君主の御前で毎夜同じ四曲を歌った。うちふたつはメタスタージオの脚本、ハッセの作曲によるもので（歌劇『アルタセルセ』のアリア〈淡い太陽〉および〈この甘美な抱擁〉である。ほかの作品はもう忘れたが、彼自身気ままに変奏する舞曲もひとつあった。」①

① Charles Burney, *The Present State of Music in France and Italy*, London, 1773, pp. 210-

初出 二〇二二年二月八日

更新 二〇二二年八月二六日